

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

「不確実性」を観光の脈略で問い直す意義 〈共同研究：観光における不確実性の再定位〉

メタデータ	言語: ja 出版者: National Museum of Ethnology 公開日: 2022-04-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 土井, 清美 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00009885

「不確実性」を観光の脈略で問い直す意義

土井 清美

観光ならではの不確実性

近年、欧米を中心にさまざまなテーマにおいてリスク・不確実性研究が急拡大している。その背景にある今日的な特徴として、地球温暖化や放射性物質による健康被害、パンデミックなど地球規模でみられる予測不能で壊滅的な被害をもたらしうる事態が本質的に科学技術の進展によってもたらされており、さらにそうした不測の事態を制御し管理するシステムや組織設計が科学技術によって下支えされているという議論(市野澤 2014)が一定の説得力をもっているからである。

このような脈絡において、観光は不確実な事態の両義性を検討するうえできわめて好適な素材といえる。なぜなら、よく知られているように、観光は科学技術を含む近代化(インフラ整備、労働と余暇の創出、グローバル化)と不可分に発展してきた現象であり、また、観光の時空間で生じるリスクや不確実性が時に業界や旅行者にとっての資源となってきたからだ。たとえば、訪問地に関する旅行者の知識は当然のことながら大幅に限定されている。観光産業はだから、これまでヒルトンやシャングリ・ラなど国際ブランドのホテルをグローバルに展開することによって、不慣れた土地において生じる健康や治安等の不安を減じ、そこでのネガティブな印

象を払拭するサービスを提供してきた。

こうしたことから、観光における不確実性に関する研究の多くは、それを忌避・縮減せねばならないという観光業界および旅行者の一般的な観点を前提としてなされてきた。これに対して私たちの共同研究が対象とするのは、不確実な状況を排除すべき問題とするのではなく、飼い馴らし、時に畏れと共に対話する観光実践である。これまでの観光研究における不確実性がつねに「主体が状況判断し制御すること」によって対処する位置づけであったとすれば、本研究における「不確実性」とは、むしろ交渉したり受け止めたりする観光実践であり、そうした観点から新たな観光研究への理論的展望を拓くことを目指す。

あわせて本研究では、「観光」とよぶ範囲を、たとえばビザを取得したり、空港のゲートを通ったりする旅行移動の過程、食を味わうことといった移動を含む多様な行為の集合体として捉え直す。そのうえで、近代特有の社会現象や常に更新される社会現象として分析されがちな観光の様式において通底するものも含めて明らかにしていきたい。

既往研究における「不確実性」の位置づけ

観光に関するリスク・不確実性を扱った研究を眺めると、個人による意思決定から国家による観光政策まで、扱われる対象範囲は広いが、そこで展開される考察はリスク管理の技術とそれに回収されえない個人の認識や実践との間に生じるズレの洗い出しが主であり、理論的研究はまだ少ない。ゆえに何が「不確実性」と名指されるのか、大きな二極の理論的隔たりが解消されることなく数多くの各論が展開してきたと言わざるを得ない。すでにウィリアムズとバラージュ(Williams and Baláz 2015)によって指摘されているように、その二極とは、観光におけるリスク・不確実性を実証的なものと捉えるアプローチと構成主義的なものと捉えるアプローチである。前者においては、人間の知性や認識する力は有限であり、リスクや不確実性というものは客体化されるという前提で議論がなされており、そこで焦点があてられる「不確実性」とは、宿泊地の隣人の騒音、食中毒、悪天候、津波、暴動のほかグローバルな経済危機、軍事介入、地震などである。後者は、たとえば新奇性を求める個人旅行者はパッケージツアー参加者が考える健康や治安リスクをリスクとは捉えないなど、人によってどうしてそれが不確実な現象な



外国人観光客に人気のある、スワヤンブナート寺院(2021年、カトマンズのタメル地区、渡部瑞希撮影)。

土井 清美 (どい きよみ)

中央学院大学現代教養学部、専門は文化人類学、巡礼・観光研究、フィールドワーク方法論。著書に『途上と目的地—スペイン・サンティアゴ徒歩巡礼路 旅の民族誌』(春風社 2015年)、「フィールドにて: 上級編—身体を使って理解する」市野澤・碓・東編、『観光人類学のフィールドワーク—ツーリズム現場の質的調査入門』(ミネルヴァ書房 2021年)、論文に Ready-to-Hand and Out-of-Reach: Sensory Experiences of the Landscape on the Camino de Santiago. *Japanese Review of Cultural Anthropology* 21 (1): 357-386 (2020年) などがある。



Flight	Destination	STD	ETD	CTR	Gate	Status
JL 746	NARITA	8:40				
TR 393	SINGAPORE	10:00				CANCELLED
3K 762	SINGAPORE	10:00				CANCELLED
PR 872	TAIPEI	10:45				CANCELLED
CI 702	TAIPEI	10:45				CANCELLED
PR 654	RIYADH	10:45				CANCELLED
8R 682	DAMMAM	11:10				CANCELLED
CZ 3092	GUANGZHOU	11:55				CANCELLED
OZ 702	INCHEON	12:00				CANCELLED
KE 622	INCHEON	12:05				CANCELLED
BR 272	TAIPEI	12:30				CANCELLED
GF 155	BAHRAIN	12:40	12:40		12	CANCELLED
PR 684	DOHA	12:45				OPEN
KL 810	KUALA LUMPUR	13:00				CANCELLED
TG 621	BANGKOK	13:00	13:00	34-39	11	OPEN
MH 807	KUALA LUMPUR	13:15				CANCELLED
JL 742	NARITA	14:25				CANCELLED
NH 870	HANEDA	14:50	14:50			CANCELLED
BI 684	B.S BEGAWAN	15:00			06	CANCELLED
PR 3590	B.S BEGAWAN	15:00				CANCELLED

新型コロナウイルス感染症の影響を受け、マニラ発着の国際便のほとんどが欠航となった(2020年4月、マニラ国際空港出発ゲート付近、石野隆美撮影)。

のか理解に苦しむ事象を文脈依存的な不確実性として焦点化する。

上記のような何を「不確実なもの」と扱うかの差異は、主体と客体の輪郭が明示される議論においては当然のごとく噴出する認識論的差異といつてよいだろう。別の言い方をすると、不確実な事態を客観的な事実とする場合、不確実な事態はそれを認識する側から独立にあって「認識される側」にあるということになる。そして不確実な事態を社会的に構成されたものとする場合、不確実な事態は「認識する側」におけるということである。

不確実性が立ち現れる、不確実性と対話する

観光は現代の社会状況が先鋭的に反映される実践であると同時に、巡礼や儀礼といったある種の世界観を基底にもつ現象でもある。10人から成る共同研究メンバーのなかには、観光現象を問題関心の中心に据えて取り組んできたメンバーだけでなく、賭博や宗教的实践を軸に研究を進めてきた研究者もおり、「観光」と「不確実」を、近年の観光研究では顧みられなくなった古典的な議論と接点を持ちながら議論を深めるうえで有意義となるであろう。第1回目の研究会を終えた現在、共同研究のメンバーが扱うトピックは、野生動物を見物するツーリズムの現場でお目当ての動物種を発見できるかどうかという問題や、災害遺構を観光資源化する際、将来いつ発生するかわからないが再び必ず起こるであろう災害とどう向き合いながら保存するかという問題、訪日観光ビザの申請から発行までに関与する機関や人びとなど、地域も研究対象も多様である。だが、メンバーで共有しうる問題関心は、行為遂行的に立ち現れる予測不可能であったり、手探りした

りする時間的・空間的不確実性にあることが明らかになった。それらは言い換えるなら、少なくとも不確実性を輪郭が明瞭な客体化されうるもの、あるいは言説や表象を通じて「社会」や「文化」といった観念体系の同一性のもと共有される認識対象(たとえば Douglas and Wildavsky 1982など)ではなく、関与したり経験するただなかでかたちづくられ、立ち現れ、対話することになる予測不可能な時間性や世界観である。

今後の見通し

本研究で期待される成果は3つある。第一に、不確実性は忌避・縮減されねばならないという一般的な観点に抗して、飼い馴らし、ときに畏れとともに対話する観光実践を、事例に即して理解するための記述分析のフレームを提供することである。第二に、近代特有の社会現象とみなされる観光における、不確実性の普遍的側面を明らかにすることで、人間中心主義的な自然改変の行き過ぎを問う近年の人類学的議論へと接続することを目指すことである。第三に、against から with へ、不確実性に向き合う態度を転回することにより、安定・安全=良い観光という常識を揺さぶり、19世紀から拡大を続けてきた観光産業の存在意義を問い直すことである。

共同研究会のメンバーは、上述した前提あるいは研究会全体の方向性を都度確認しあい、事例を示しつつ、理論的枠組みを明瞭にする。初年度は2回の研究会を行う。すでに開催された第1回目の研究会では、観光における不確実性のレビューと本研究会の方向性の確認、それらを踏まえた各メンバーの問題関心について議論した。次回は「不確実性」の問い方を再度検討し、議論の出発点を共有するほか、旅行移動と滞在を焦点とした不確実性をめぐる事例検討を素材に、より広範なトピックに適用しうる理論的考察を行う。

引用文献

- 市野澤潤平 2014 「リスクの相貌を描く—人類学者による『リスク社会』再考」東賢太郎ほか編『リスクの人類学—不確実な世界を生きる』pp.1-27. 京都: 世界思想社。
- Douglas, M. and A. Wildavsky 1982 *Risk and Culture: An Essay on the Selection of Technical and Environmental Dangers*. Berkeley: University of California Press.
- Williams, A. and V. Baláz, 2015 Tourism Risk and Uncertainty: Theoretical Reflections. *Journal of Travel Research* 54 (3): 271-287.